

芦城公園ろじょうの誕生

三の丸の小松監獄の金沢移転を契機に、明治三十八年（一九〇五）三月、小松町は跡地に「公園」の造成を決議した。日露戦争の最中である。翌三十九年、日露戦争戦勝記念として三の丸の地を無償で貸し下げられ、造成に着

手。同年中に発足した。三十九年には小亭も設けられ「芦城公園」と命名された。四十二年には公園内に能美郡公会堂が建設されたものの、まもなく焼失（四十四年）。大正二年（一九一三）に再建された洋風の建物は郡会議事堂とされた。郡制が廃止された大正十二年三月以降は、能美郡自治館として各種団体等の活動拠点に利用された。

芦城公園は、昭和期に入ると博物館、図書館、美術館などが並び建つ文化ゾーンへと転化した。昭和十年（一九三五）には、第一回商工祭の式典が、利常



芦城公園入口(小松市立博物館提供)



芦城公園内(小松市立博物館提供)

公銅像前で行われている。もともとの銅像は、大正五年（一九一六）小松の呉服関係者が建てたもので、公園のシンボルのひとつだったが、太平洋戦

争中、金属回収に処された。

その太平洋戦争の始まった昭和十六年（一九四二）四月三日、小松市は市制実施祝賀式を稚松小学校で行う。芦城公園のラジオ塔前の祭壇では、県知

事や小松町長ほか合併町村三役、同町村会議員が表彰された。祝賀会の式辞で山口又八新市長は、「一大産業都市の建設を」と訴えている。

こうして芦城公園は、春には花見、

冬には特設のスキー場が作られ、広場ではサーカス、自転車競技、野球など、小松市民の憩いの場として楽しまれてきたのである。

（本康宏史）



芦城公園の小亭(小松市立博物館提供)



前田利常の銅像(小松市立博物館提供) 大正5年(1916)建造